

## 30周年記念号に寄せて

名寄市立大学

名寄市立大学短期大学部

学長 青木 紀

名寄市立大学道北地域研究所は1982年、当時の美土路達雄学長の主導で設立された。そのねらいは、大きく3つ、短期大学教職員の個人研究推進と共同研究の構築、地域振興と研究推進の接点としての場としての研究所、他の研究機関や自治体専門職員との連携と共同による課題解決、にあった。

30号に及ぶ「地域と住民」をざっと概観していくと、それぞれの思いが伝わってくるし、小さな短期大学として教員も少ないなか、よく所員が奮闘してきたものだと率直な感想も抱く。なかでも個人的に印象に残ったのは、関連市町村の首長を含んで何回か取り組まれている地域振興シンポジウムの記録などであった。

このあたり、市町村合併も進み、2012年には名寄市と士別市が中心となって「北・北海道中央圏域定住自立圏構想」が関連市町村間（両市以外には和寒町、剣淵町、下川町、美深町、音威子府村、中川町、幌加内町、西興部村、枝幸町、浜頓別町、中頓別町）で調印されたものの、その後の動きが見えない現状を踏まえたとき、本研究所がその推進にかかわって何らかの触媒の役割を果たすことは、文字通り研究所の設立目的にも沿ったものとなるだろう。だが「定住構想」実現のためには、周辺市町村の産業振興だけでなく、とくに名寄市や士別市などの中心都市の「まちの分析」「まちづくりの分析」も相当突っ込んだものが求められてくるようにも思う。しかし本誌を眺めても、そのあたりはなぜか十分展開されてこなかったことにも気がつく。また、このところ本学では、そのミッションの定義ともかかわって、キャッチフレーズに「ケアの未来をひらく名寄市立大学」という文言を使っているが、その視点からすると「地域には課題がいっぱいころがっているのに」という読後感をも持つ。そこには、これまでの歴史の、その時点時点での研究所を担った主要メンバーの関心、あるいは研究所における本誌「地域と住民」そのものの位置付け、また“四大化”（2006年）以降における、本体である保健福祉学部・短期大学部と研究所の関係のありよう、さらに一貫して研究所には専従教職員は貼り付けられてこなかった現実など、研究所に相応しい環境が整えられたことはなかったこともあるのだろう。

だが、今後の道北地域の見通しや本学のあり方から研究所の将来を展望すると、本研究所はこれまでのように、一方で本学の必ずしもメインではない領域の課題が地域から提起されるからこそ「研究所」で取り組む以外にないことをも意識しながらも、やはり他方ではメインである専門領域での、すなわち“地域からケアの未来をひらく”ことを可能にするような取り組み、これを本格化する必要があるようにも思われる。COC（地（知）の拠点整備事業）の強調するような、大学と地域が組織的に連携しながら地域課題の解決を図っていくとはそういうことなのだろうと思う。